緒方貞子元教授（五十嵐国際学部）インタビュー

変動する状況の中で――国連難民高等弁務官に就任――求められる学生の広い視野

前年度まで本学の外国語学部長を務められていた、緒方貞子元教授が、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR・本部ジュネーブ）の最高責任者、国連難民高等弁務官に任命された。難民高等弁務官は国連事務次長職で、同職の日本人としては明石康事務担当事務次長、中嶋宏世界保健機関（WHO）事務局長に次いで三人目、女性が国際機関の日本に対する新たな期待の現れであるという。また女性が選ばれたことは、女性の社会進出に対する期待の現れである、と語ってくれた。難民行政の重要性や日本人、特に学生の意識のあり方、難民高等弁務官の仕事に対する意気込みなどを、本紙のインタビューに対し、語ってくれた。

（聞き手　編集局）

理想と現実のはざまで　難民行政の長になるまで

――先生が難民高等弁務官になられるまでの経緯を教えてください。

緒方　先人者がノルウェーの方だったんです。ノルウェーの内閣が変わりまして、急にどうしても務大臣に要請があって、その方が突然辞められたんです。これが十一月の初めぐらいだと思います。そこで様々な国から候補者が出まして、日本からも出したらどうかという話があったらいいんですね。そこで外務省の方から私に打診がありまして、それでちょっと考えたんですけど、いままで人権の問題とか南アのことがいろいろ関わってきましたし、国際機関の長になっていうのは日本にとっても大変なチャレンジだから、一応それでは候補者になりましょうということだけ合意したんです。それが十一月の中旬の話です。各国から七人から十人の候補者が出して国連事務総長が提案して総会がそれを承認するという手続きなんです。総会すと聞いた時はたいへんびっくりしました。十二月二十二日に総会が承認して、そして決定になったわけです。ということですから候補者になってからも決定されるまで一ヶ月以上あったわけですけど、その間分からなかった訳ですね。そもそもヨーロッパ難民だったら日本の若者の態度を、どのように感じになりますか。

緒方　一九七九年にインドシナ難民が流出しました時、これは日本にとって、はじめての経験だったんですね。近い地域でこれだけの人が流出して、しかもアジアで一番始めに受けるのは日本に向けて、もうそれ、どうへ行ってもうそれ、という期待が非常にあったんです。その時私は上智大学にいる数ヶ月前だったんですけど、現地に行って、現地の状況を広く日本に伝えましてね。その時日本は初人学は、その頃から考えると、相当増の問題ということ、お金は出したんですけど、人は乏しいなかったんです。各国からボランティアが来てたくさんいる所だと私は思っているんですけど。

――現在はどうでしょうか。

緒方　現在はあまり聞きませんね。ですけど、そういう契機になるような事件が起ってなかったからじゃないんでしょうか。

――これからの日本の役割について、どのようにおお考えですか。

緒方　南の問題というのは、国際関係の上で非常に大きい問題になってきているんですね。北も南の貧富の差、開発援助の問題もありますけど。それがいろいろな形で急に人間が流出するとかね、そういう難民、移住民、経済難民、外国人労働者、移民、今部カテゴリーが変ってきますけど、非常に共通のものもあるんですね。大量の人間の移動ということは、相手国の問題ということに、どうやって国際社会というのは協力して座住できるか、そこに責任をもって、上智大学をいろい問題になってきます。去ってしまわれるわけですけど、おそらく皆さんが関心をもって参加していける仕事というのは、非常にたくさんあると思います。広い意味で。

緒方　やはり難民問題の重要性というものを、世界の指導者、政府、オピニオンリーダー、大学生などが知ってもらわなければならないわけです。平和についても経済についても、三は世界の百ケ国以上の事務所にいます。難民状況としては、難民は非常に増えているわけで、ここ十年ぐらいで倍になっています。十年前に八百万人とされていたのが、今は千五百万人とも千六百万人とも言われています。百万人のうちの四分の一が本部のある所にいます。難民の状況としては、様々な迫害、政治的、宗教的、信条に基づくもの、人権など、色々な事で迫害された人たちが、出て来た人たちを、まだ自国に押し戻すというのは絶対できないわけで、そのために自分の国を出なければならない人を難民というんですね。その背後には、国際的な動きが多いということと、経済状況が悪化するなかで、政治的不安定が起って出ることか、経済と政治からめたような状況が人間の流出ですね、大量の流れを増やしていかなければならないわけです。

――先生は難民高等弁務官に就任、八二年八月外国語学部長、ジョージタウン大学大学院、カルフォルニア大学大学院で博士号を取得。聖心女子大学教授、国際基督教大学教授を経て、七六年から七九年にかけて日本国連代表部公使。

おがた・さだこ

一九八〇年に外国語学部教授に就任。八二年八月外国語学部長。八九年一月外国語学部長。

――本号8ページ――

▼履修登録新方式（2面）
▼代議員から声明文（3面）
▼企画・青葉の岩岸（5面）
▼企画・上智大学の激時記（6面）
▼企画・学び舎私観（7面）
▼企画・「学生運動」希望と理想、理念と血涙（8面）

日本に期待される援助　南北問題に関心を

――その悪化する難民のように日本の態度、光びすんですけど。だけどそういうアピールをしたら、すい分たくさんの人たちが民間のボランティア団体などを作りましてね、そしてむこうへ行って働く、キャンプで座住する人などが増えたわけです。ですね。北も南の貧富の差、開発援助の問題もありますけど。それがいろいろな形で急に人間が流出するとかね、そういう難民、移住民、経済難民、外国人労働者、移民、今部カテゴリーが変ってきますけど、非常に共通のものもあるんですね。大量の人間の移動ということは、相手国の問題ということに、どうやって国際社会というのは協力して座住できるか、そこに責任をもって、上智大学をいろい問題になってきます。去ってしまわれるわけですけど、おそらく皆さんが関心をもって参加していける仕事というのは、非常にたくさんあると思います。広い意味で。

緒方　やはり難民問題の重要性というものを、世界の指導者、政府、オピニオンリーダー、大学生などが知ってもらわなければならないわけです。平和についても経済についても、三は世界の百ケ国以上の事務所にいます。難民状況としては、難民は非常に増えているわけで、ここ十年ぐらいで倍になっています。十年前に八百万人とされていたのが、今は千五百万人とも千六百万人とも言われています。百万人のうちの四分の一が本部のある所にいます。難民の状況としては、様々な迫害、政治的、宗教的、信条に基づくもの、人権など、色々な事で迫害された人たちが、出て来た人たちを、まだ自国に押し戻すというのは絶対できないわけで、そのために自分の国を出なければならない人を難民というんですね。その背後には、国際的な動きが多いということと、経済状況が悪化するなかで、政治的不安定が起って出ることか、経済と政治からめたような状況が人間の流出ですね、大量の流れを増やしていかなければならないわけです。

――先生は難民高等弁務官に就任、八二年八月外国語学部長、ジョージタウン大学大学院、カルフォルニア大学大学院で博士号を取得。聖心女子大学教授、国際基督教大学教授を経て、七六年から七九年にかけて日本国連代表部公使。

おがた・さだこ

一九八〇年に外国語学部教授に就任。八二年八月外国語学部長。八九年一月外国語学部長。

――本号8ページ――

▼履修登録新方式（2面）
▼代議員から声明文（3面）
▼企画・青葉の岩岸（5面）
▼企画・上智大学の激時記（6面）
▼企画・学び舎私観（7面）
▼企画・「学生運動」希望と理想、理念と血涙（8面）

上智新聞

発行所　上智新聞編集局
郵便番号102　千代田区紀尾井町二　上智大学内
電話（3238）3015
発行人　編集局長　矢吹　純子
編集人　編集局長　佐々木　肇
一部150円　予約購読1年分送共1800円

合宿教習生募集中
最短17日間コース
白鷹自動車学校
申し込みは上智大学購買部へ
TEL　03(3238)3013

新入生特集号